浄土　第78巻6号（毎月1回1日発行）平成24年7月1日発行　昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly JŌDO

2012 7/8 July August

法然上人鑽仰会

駅をめぐる点景

絵 村上健

2012年の表紙

驫木駅（とどろき）

JR五能線

単式ホーム1面1線を持つ地上駅で五所川原駅が管理する無人駅。駅舎は木造で待合室のみがあります。JRのトクトクきっぷ「青春18きっぷ」の宣伝ポスターにその薄暮の景観が使われ有名になりました。「驫」は日本の駅名に使用されている漢字の中で最も画数が多い（30画）こと。そして、男はつらいよ奮闘編（第7作）に、さくら（倍賞千恵子）が驫木駅に降り立つシーンが登場します。マドンナ役の太田花子（榊原るみ）は驫木出身の設定で1970年（昭和45年）当時の旧駅舎と五能線が登場したことなどが有名。

7/8月

浄土

2012/7・8月号　目　次

法然上人の教えと共に……曽根宣雄　2
会いたい人　岸部一徳さん②……関　容子　8
響流十方……林田康順　16
法然上人をめぐる人々……石丸晶子　20
江戸を歩く……森　清鑑　28
連載小説　渡辺海旭……前田和男　34
誌上句会……選者＝増田河郎子　44
マンガ　さっちゃんはネッ……かまちよしろう　47
編集後記……48

表紙裏・　駅をめぐる点景　村上 健

背表紙裏・泰雲の美味探訪

表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人の教えと共に

大正大学仏教学部准教授
曽根宣雄

私は、山梨の小さなお寺に生まれました。幼い頃より、買ってもらったカセットテープを聴いて日常勤行式を覚えたり、自然な形でお念仏や法然上人に接していたこともあり、疑問を持つこともなく六歳の時に大本山増上寺で得度しました。今にして思えば、法然上人の絵本を何回も読む、法然上人のことが好きな子供でした。棚経等の檀家参りは、小学校一年生の頃からしました。最初は、母や近所の檀家のおじさんに連れられて回ったことを憶えています。小学校三年生の頃からは、御檀家さんの葬儀があると、小学校を半日で早退して小僧として参列しました。（葬儀への参列は、中学に入学するまで続きました。）当時の私は、檀家のおじいさんやおばあさんが喜んでくれるのがうれしくてやっていましたが、そのことでかなりいじめられたことも確かでした。周囲の子から「ハゲ」「チンネン」「クソ坊主」等の言葉を投げかけられることは、日常茶飯事でした。私も負けん気の強い方でしたので「悔しかったら真似してみろ」と言い、みんなから「そんなもの真似したくねえ」と言われたこともあります。ある同級生からは「お寺は、人が死んでお金が儲かっている」と言われたこともあります。この一言は、幼い自分にとって大きな心の傷となりました。どんな職業でも、多かれ少なかれいじめの対象となるのかもしれませんが、これは質が違います。自分が寺の息子であること自体がひどく卑しいことのように思われました。檀家のおじいさんやおばあさんは、喜んでくれるふりをしているだけなのかもしれないとも思いました。この言葉は、その後進路を考える上で、自分の心の中から離れることのないものでした。中学校に入学してからは、法衣を着ることが嫌になり、檀家参りは苦痛でしかありませんでした。俗的な話で恐縮ですが、法衣の姿を同年代の女の子に見られることが、何よりも堪えられないことだったのです。その後、地元の進学校である日川高校に入学したのですが、高校時代の自分は僧侶になるということに対して葛藤ばかりしていました。今から思えば本当に恥ずかしいことなのですが、周りの同級生が共通一次を目指し

て勉強している中で、宗門大学の偏差値を知り、勉強への熱意を持つことなく、虚しい日々を送りました。

高校時代に、たまたま読んだ本に「浄土宗＝他力本願」と書いてあるのを見て、非常に悲しい気持ちになったことがありました。それは、他力という語を「棚からぼた餅」とか「楽をして何かを得る」という俗的な意味合いで理解してしまった故に生じたことですが、そのときはどうせ寺に生まれるなら自力で悟る宗派の方がまだましだったなどと思ったものです。今思えば、我が身を知らない智者のふるまいということになりますが、若気の至りです。ただ、この時の自分の誤解というものは、おそらく世間一般の人もするであろうものでしょうから、他力というのは凡夫を救済してくださる阿弥陀様の救済力のことであり、世間的にいわれる楽をして何かを得るという意味ではないということをきちんと伝えて行く必要があると思います。

浄土宗は軟弱な教えなのかと悩んでいた時、ＮＨＫの教育テレビで法然上人の教えについての講座があり、偶然それを視ました。その番組の中で「悟ろうと思っても悟れない人はどうしたら良いのかというのが法然上人の悩みであった」という言葉に出会いました。当時の私にはこういう発想がなかったので、この概念自体が衝撃的でした。悟りのために厳しい修行をし、みんなが悟れるのが仏教だと思い込んでいた私の考え方を根底から覆すものでした。それ以降、思いも新たに法然上人に興味を持つようになりました。

大学は、家から離れたいという一心で、佛教大学に進むことにしました。そんな私に大きな転機が起こります。大学入学を前に親友のＦ君が、交通事故で亡くなってしまったのです。Ｆ君は家業の建設会社を継ぐために、日大の理工学部への進学が決まっていましたが、その入学を目前にした死でした。私は、とても混乱し、狼狽（うろた）えました。幸いにも彼の菩提寺が法類の法蔵寺さんだったので、お願いして通夜・葬儀の僧侶の一人として読経さ

せていただき、必死にお念仏を称えました。この体験は、私に「死」というものの不条理さを突きつけるものでした。悪いことをして世の中に迷惑をかけている人間が大勢いる中で、なぜ彼が死なねばならなかったのか悩み、その答えを仏教の中に見つけようと思いました。また法然上人の教えが今を生きる私達にとってどのように役立つのか知りたいと思い、浄土学を学ぶようになり、その後学部から修士課程に進み、博士課程からは大正大学にお世話になりました。

学んでいく中で、私の精神的な支えとなったのが「往相廻向・還相回向」の教えです。善導大師の『発願文』に「聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ。かの国にいたりおわって、六神通をえて、十方界に入って、苦の衆生を救摂せん」とあるように、往相廻向とは極楽浄土に往生することをいい、還相回向とは極楽浄土に往生の後、十方界に戻って衆生を救済するということです。この教えによって、私はF君との関係というものを改めて構築することができました。彼が極楽浄土に往生し、菩薩となっていつも自分を見守ってくれているのだということは、自分が辛い時に支えとなったことはもちろんのこと、だらけてしまっている時に自分を叱咤するものになりました。

もう一つ自分の支えとなったのが「三縁」の中の「親縁」の教えです。法然上人は『往生浄土用心』において、

衆生仏を礼すれば仏これを見たまう、衆生仏を称うれば、仏これを聞きたまう、衆生仏を念ずれば仏も衆生を念じたまう。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて、仏も衆生も親子のごとくなる故に親縁と名づく。

と述べられています。お念仏をお称えするということは、合掌し礼拝して行うことですから、私達の「礼・称・念」という行為に対して阿弥陀様が「見・聞・念」という人格的

な対応をしてくださるということは、お念仏行についての説明であるということができます。念仏を修する時の、私達の身と口と意の三業と阿弥陀様の身と口と意の三業は、決して離れることがないのです。そして、阿弥陀様が常に親しく衆生に接してくださることは、あたかも親子の関係のようであると説かれています。私は、自分のお念仏が阿弥陀様に常に届きお聞きいただいている、阿弥陀様と私達は「呼ぶ・応える」という「呼応関係」を有するのであり、常に共にあるのだということにとても感激しました。私の叔父と今年一月に亡くなった叔母はこの教えが大好きで、叔父は定年後立ち上げた会社の名を「三縁」としたほどです。私は、私達の念仏の声が阿弥陀様に届く時、浄土に往生して菩薩となった叔母にもきっと届いていると思っています。

数年程前に、自坊において法話の会を立ち上げ、月に一度開催をしました。出席者は十人弱でしたが、みなさんと一緒にお念仏を称え、その後お話をする会でした。出席してくださる方は、みなさん非常に熱心に聞いてくれました。ある檀信徒の方からは法然上人について「こんなにやさしいお坊さんがいたんですね」といわれ、非常にうれしく思いました。法然上人の教えを拠り所にしてくれる人がいるということは、大きな励みにもなりました。ところが私が一生懸命にやればやるほど、「副住職は理想的なことばかり言っている」とか「別に俺達は、法然の教えが無くても問題なく生きてきた」というような声を耳にするようになりました。さらには、身に覚えのないことまで言われるようにもなりました。これは、ほんの数名の人達によるものでしたが、私自身は夜も眠れずノイローゼのようになってしまいました。家内によれば家族に対してもピリピリした態度で接していたそうです。その後、幸いにも、博士課程の時にお世話になった、深川の心行寺の鈴木定光上人のおかげで、芝組の竹叢軒に管理人として家族で住まわせていただくことになりました。不思議なもので本年の二月には、山梨にいた時は望んでも授かることのなかった三人目の

子供にも恵まれました。また竹叢軒では、月に一度教え子達ＯＢが集まって、法然上人の教えの勉強会も行っています。

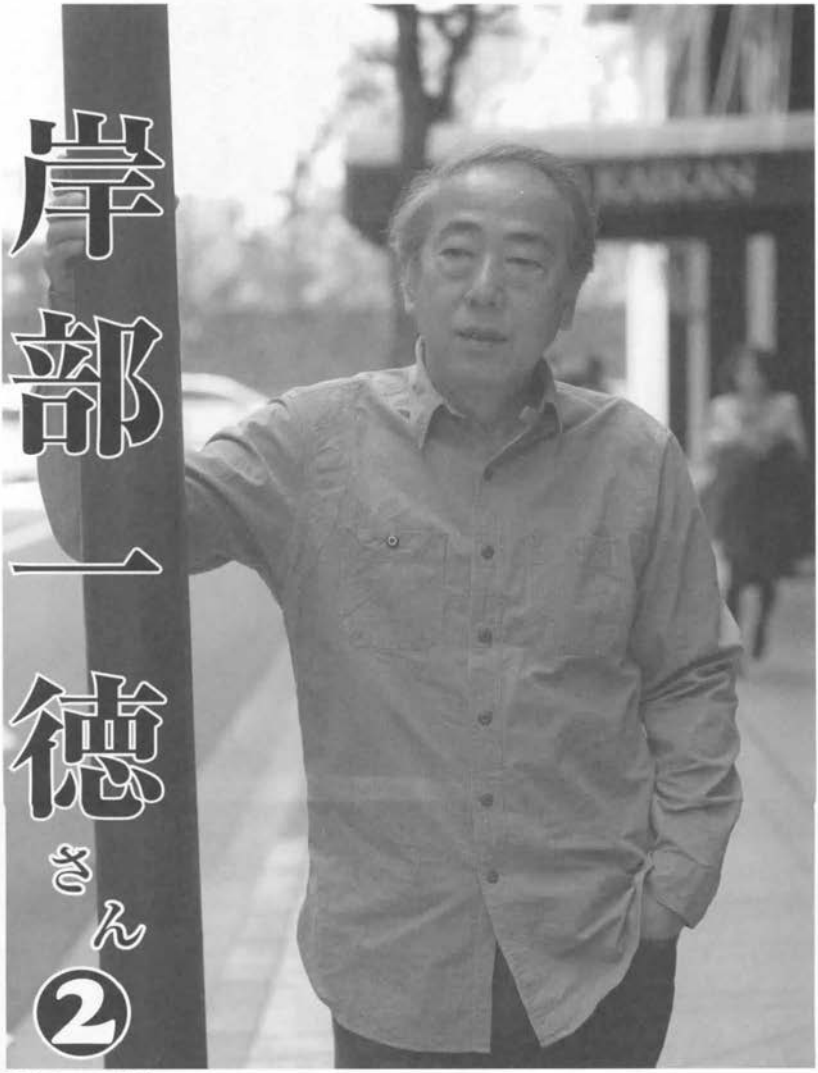
今は、大正大学の仏教学科で教員をしていますが、先のことを悩みながらの日々です。私のお念仏は、毎日、自分の悩みを念仏の声に乗せて阿弥陀様にお届けしているようなものです。仏教カウンセリングの大家である中原実道先生は、「阿弥陀様はスーパーカウンセラー」だとおっしゃいます。私が、お念仏をお称えする時、阿弥陀様は常にその声を受け止め護念してくださいます。浄土にいるＦ君も叔母も護り導いてくれている。それこそが私の支えです。

私が今一番幸せを感じるのは、家内と子供達と一緒にお勤めでお念仏をお称えしている時です。今年小学校一年生の長男は、昨年大本山黒谷金戒光明寺において私の恩師である高橋弘次台下の元で得度しました。長男には本人が希望したのでマイ木魚があり、お念仏の時はそれを叩きながらお称えしています。三年生の長女もいつの間にか『一枚起請文』は、覚えてしまいました。最近では、二月に授かった次男もお念仏の時に参加しています。（ちなみに赤ちゃんは、木魚での合間打ちのお念仏が好きなようです）長男は『一枚起請文』を拝読する時に「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」という箇所で急に声が大きくなります。また阿弥陀様が一番偉い仏様で、法然上人が一番偉いお坊さんだと言っています。まだ、意味は良く判っていないようですが、微笑ましくてなりません。お念仏は、家族そろってできる行です。いろいろあり悩みつつの毎日ですが、お念仏を称えながら自分は法然上人の浄土宗で良かったとつくづく思うこの頃なのです。

連　載

会いたい人

関 容子



撮影／タカオカ邦彦

ザ・タイガースのメンバーが再会し、もう一度コンサートの全国ツアーを展開しよう、という話はすぐにまとまった。

「瞳みのると僕たち、沢田研二と森本太郎と僕が三十八年ぶりに顔を合わせたのは渋谷の居酒屋で、彼がときどき慶応高校の生徒たちと行っている店でした。会ってみると彼が一番変ってなくて、遠目で見たら昔のまんまみたいで嬉しかった。もともと音楽が好きで集ったグループですから、少し時間がたつと全部昔に戻って、タイガースにじゃなくて少年のころに戻りました。一人じゃ絶対戻れないですからね」

岸部さんは練習期間と公演のために半年間、俳優の仕事をキャンセルした。

「ファイナル・コンサートは四十一年前の解散コンサートと同じ一月二十四日の武道館、と決めて、だんだんツアーがその日に近づいてくるとみんな寂しくなってきてね。若いとき、お前とは一生会わない、なんて喧嘩別れをしたけど、人間、年を重ねると考え方が変るんですね。相手のことを考えるようになる。機会があって音楽少年に戻って、僕は元々こういう人間だったんだな、と思えた。それが一番よかったですね」

ファイナル・コンサートのライブを私はテレビで見た。平均年齢六十四歳のタイガース。水を得た魚のように張り切る瞳みのるのドラムの前で、三人が動きを揃えて右に左に、斜めに軽くジャンプするのが楽しそう。会場を埋めつくした熟年以上の大群衆が、いっせいに熱狂して青春回帰を果していた。

「あれは感動的でしたね。つくづく音楽っていいなぁと思いました。芝居では絶対起り得ないシーンですものね。これも沢田がずっと音楽活動を続けていてくれたおかげだと思っています。彼の艶のある声はちっとも昔と変ってなかったし、むしろ今のほうが馬力があってよかったくらいです」

『死の棘』監督／小栗康平（1990年）写真提供／松竹

岸部さんが俳優に転じるキッカケになったのも沢田研二だった。

「俳優としては沢田のほうが早くて、僕は三十歳過ぎてからです。『悪魔のようなあいつ』で彼が三億円事件の犯人の役で、僕はドラマの音楽で行ってたんですけど、演出の久世光彦さんに、出てみたら？　と言われて、ヤクザAみたいな役でちょっと出ました。完全に音楽をやめたときに、ドラマやってみないか、と言ってくれたのも久世さんです」

岸部一徳という俳優名を考えてくれたのは、内田裕也夫人の樹木希林さんだった。

「俳優をやるんならと、希林さんと大楠道代さんの事務所に入れてもらって、一徳って、僕の父の名前の徳之輔から取ったんだと思いますが、五十代になれば似合ってくる名前だからと希林さんがつけてくれました」

俳優岸部一徳の名を一躍高めた作品は、島尾敏雄のすさまじくもやりきれない私小説を原作とした『死の棘』（平成二年）。岸部さんは四十歳を少し過ぎたころだった。

「小栗康平監督が映画化を思い立ったときは島尾さんがまだ生きてらして、承諾が得られたんですが、ミホ夫人が自分の役の松坂慶子さんはいいけれど、敏雄さん役が僕では気に入らない、ということで、スタートが一年くらい遅れたと、あとで小栗さんから聞きました。でも了解はしたものの、完成しても私は見ないわよ、と言われていたそうなんです。ほかにも反対はいろいろあったらしいですけど、小栗さんがどういうわけか僕でやる、と決めたらしいんですよ。原作も重いものでしたが、半分病気みたいな状態で毎日撮影を続けていましたね」

ミホ夫人が反対した理由がふるっている。

「敏雄はあの人よりもっと二枚目だ、と言われたそうです。やっぱり好きだからこそあれだけ激しく嫉妬したんでしょうね。それで、映画が完成したら、何回も映画館に通って御覧になったそうです」

島尾敏雄は妻のすすめでカトリックの洗礼を受けた人で、晩年の十七年間（昭和六十一年没）を奄美大島の名瀬で過した。寡黙な人で、神秘的で、奥深さを感じさせる不思議な魅力を持つ人だった、と当時を知る人が語っている。

写真を見ると海軍の軍服姿が似合って、なかなかのハンサム。

「映画完成の何年かあと、奄美大島の図書館の開館十周年の記念文化講演会に小栗さんが招かれたんですけど、次の作品の準備で行けなくなったので代りに行ってくれないか、と言われ、いい機会だから僕はまだ中学生と小学生だった二人の娘を連れて、行ったんです。地元の観光課の方から、僕に会ってもいいとミホさんがおっしゃっていると聞いたのですが結局みえなかった。でも是非帰りに寄ってほしい、とのことだったので、飛行場へ行く途中で訪ねたんですよ。ドアをあけて、ごめんください、って言ったら、松坂さんの、あのミホがそのまま何十年かたった感じでパッと表れたんで、本当にびっくりしました。そして娘二人に島尾さんと御自分の著書を十冊くらい、紙袋に用意してあって、将来結婚しても私たちみたいな夫婦になっちゃダメよ、っておっしゃるんだけど、娘たちもまだ小さいから全然意味がわからない（笑）。玄関先で失礼して、タクシーが動き出してふと振り返ったら、ミホさんが手を振りながら走ってずうっと追いかけてくるんですよ。どうしようかと思ったんですが手を振ってそのまま帰ってうちに着いたころ、電話がかかってきたんです。上がってもらうつもりで部屋を片づけておいたのに、会った瞬間、あ、敏雄の匂いのする人だ、と思った途端に、何もわからなくなってしまって失礼しました、とおっしゃって。僕にとっては最後にやっと認めてもらえたみたいで、本当にいい機会でした」

お嬢さん二人には、さぞ強烈な印象が残っていることだろう。ミホ夫人は平成十九年に

亡くなった。

「もういい大人になってるのに、二人とも結婚してないのは、ちょっとクスリが効きすぎたのかもしれない（笑）」

岸部さんに会って数日後、山田太一さんに電話をする用事があって、そのときに今の話をした。

「いやぁ、島尾敏雄よりも岸部さんの曖昧さのほうが、もっと島尾敏雄らしいですよ(笑)。一徳さんは一見してとらえようがない、単純でないものを内に秘めてる、いい俳優さんです。何年か前に僕の『ありふれた奇跡』に出てもらったけど、威圧的な感じで自分の娘との交際を相手の息子の家に断りに行ったかと思うと、女装クラブで女装したりする父親役で、その逸脱ぶりの巾が広いほど面白くなるんです。一徳さんは背の高い人だしね。余計面白い。娘の相手の父親役の風間杜夫さんも女装するんだけど、彼が逸脱するのは当り前みたいなものですからね（笑）」

岸部さんが女装について笑って言っていた。

「別にゲイでもなくて、女装趣味の男が世の中にいる、というのに少し驚きました。でも、風間さんと一緒に新橋の町を歩かされたのには、恥ずかしくて参りましたけどね」

岸部さんが得がたい名優だという噂は、よく耳にする。

柄本明さんは「今、役者は彼が一番じゃないですか？」と絶讃だし、勘三郎さんは、「柄本さんと僕の『てれすこ』という映画に何とかして岸部さんに出てもらいたかったけど、どうしてもスケジュールが合わなかった。あの人がちょっとでも出ると、ひと味どころか、み味もよ味も違っちゃうからさ」ということだった。

ところで、岸部さんがユニークな役で出演した原田芳雄最後の作品『大鹿村騒動記』（阪本順治監督）について訊く。

「原田さんとはあの映画の前に、テレビの

『死の棘』監督／小栗康平（1990年）写真提供／松竹

『不毛地帯』では社長と副社長、『白洲次郎』では吉田茂と近衛文麿で共演しているんですが、一緒に仕事してないときでも、遊びに来てよ、って芳雄さんに言われて、年末の餅つき忘年会に顔出したりはしてたんです。庭で若い人が餅ついて、延べ百人以上もの人が来る。知らない人も拒まない、という豪快な餅つきでした」

『大鹿村』の岸部さんの役は、昔、原田芳雄の奥さん役、大楠道代と駆落ちし、彼女が認知症になったので「もう返しますから」と戻

ってくる、というもの。この配役は岸部さん以外には、ちょっと思いつかない。

「大鹿村には三百年以上続いてる村歌舞伎があって、昔、原田さんがテレビ番組で行って、大鹿村が大好きになって、毎年行くようになった。いつか村歌舞伎を映画にしたいとずっと思っていて、それが実現したわけです」

大鹿村の人たちも多く出演して、ラストの村歌舞伎では原田芳雄が主役を演じ、黒衣姿の岸部さんが誠心誠意、懸命になって後見をつとめるシーンが感動的だった。

「撮影後、テレビの番組に芳雄さんと道代さんと僕が出た時に、俳優にとって一番大事なのは何ですか？　と聞いたら、遊びである、遊べるかどうかが大事だ。芳雄さん流には、あらゆる能力、才能がないと遊べない。その準備、研究をどれだけするかも含まれてくる。オレにとっての映画は遊びなんだ、と言うんです。若い瑛太君なんかがそれを聞いていて、いい大人が真剣に遊んでこの世を暮してる、ということを大いに学んだそうなんです」

映画完成後、試写会場に原田芳雄が車椅子で現れた姿をテレビで見て、心が痛んだ。

「芳雄さんは亡くなったけど、日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞したし、大楠道代さんも田中絹代賞をもらいましたから、よかったと思っています」

原田芳雄の「遊びの精神」は、岸部さんの音楽少年時代から今日にずっとつながっていると言える。

「ええ、京都でみんなで集まってバンドをやろうというのがスタートですからね。この間のコンサートで遊び仲間と原点に立ち帰って、つくづくそれを実感して、これもよかったと思っています」

（この項おわり）

阿弥陀とは、これ天竺の梵語なり。ここには翻じて無量寿仏という。また無量光仏ともいえり。また無辺光仏・無礙光仏・無対光仏・炎王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智恵光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏ともいえり。（法然上人『逆修説法』三七日）

（「阿弥陀」とは、インドの言葉の音写語です。中国や日本では、それを翻訳して無量寿仏といいます。また無量光仏ともいいます。または無辺光仏・無礙光仏・無対光仏・炎王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智恵光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏ともいいます。）

人間の叡智を超えて―十二光仏―

去る五月二十一日早朝、九州地方南部から関東地方にかけての広範囲で金環日食が見られました。地球の公転軌道と月の地球周回軌道が共に楕円なため、地球から見た太陽と月の直径は常に変化しています。月の直径が太陽より大きい場合を皆既日食といい、逆の場合は、月の外側に太陽がはみ出して光の輪ができるので、これを金環日食といいます。今回の金環日食は、東京や大阪、名古屋など、広いエリアの大都市を中心に、日本の人口の三分の二にあたる八三〇〇万人の生活圏で見ることができました。これほど広範囲に金環日食が見られるのは、承暦四年（一〇八〇年）以来、九三二年ぶりの出来事といいますから、それこそ法然上人がお生まれになる以前に遡らなければいけないほどです。老若男女を問わず、日本全土で大きな話題を巻き起こしました。かくいう私も、文房具店で専門の日食グラスを買い込み、準備万端整えていました。ところが、私の住む横浜市鶴見区周辺は、その時間帯に限って厚い雲に覆われ、日食の気配を感じることすらできないままに終わってしまいました。軽い落胆を味わいつつ向かった、その日の大学の講義で、学生達に尋ねたところ、多くの学生達が日食を満喫したことを知り、少々悔しい思いをした次第です……。

それにしても、こうした日食が起こる時間や地域を一分一秒、市町村単位に至るまで詳細に予測する近代天文学の進歩には、ただただ敬服させられます。

そもそも、『古事記』や『日本書紀』に語られる、天照大神（あまてらすおおみかみ）が天岩戸（あまのいわと）に隠れて世の中が暗闇になるという神話を筆頭に、日食をはじめとする天体の営みを神秘的な力のなせる業とした神話は世界各地に見ることができ、枚挙に暇がありません。なるほど、明るさや温かさの源泉であり、あらゆる命の育みの大本ともいえる太陽が、目の前で欠けていく有り様は、その理由を知らない人々にとって、まことに恐ろしい出来事だったのでしょう。無論、今や、先の金環日食をそのように解釈する方は皆無といっていいでしょう。

加えて、先日、天文学にまつわるエッセーを読んでいたら、毎年四センチずつ、月が地球から遠ざかっていると知りました。読み進めていくと、数十億年後には地球の自転と月の公転の周期が一致して、遠ざかっていた月の動きも自ずと止まり、その時、月は地球の特定の場所からしか見ることができなくなるそうです。そんな事態まで計算していることにあらためて感心しました。

とはいえ、こうして太陽や月の動きをどれほど詳細に察知できるようになっても、否、それを緻密に知ることができるようになればなるほど、その壮大な大宇宙の営みにあらためて感嘆してしまうのは私だけではないでしょう。

冒頭に記した法然上人のご法語は、私達の救い主・阿弥陀さまが具えている

さまざまな働きに基づくお名前を『無量寿経』の説示に沿って述べられたものです。つまり、阿弥陀さまは、無量寿―量り知れない寿命、を具えた仏であると共に、①無量光―量り知れない光、②無辺光―すべての場所を照らす光、③無礙光―いかなるものにも遮られない光、④無対光―比べるもののない光、⑤炎王光―自在に燃え盛る炎王のごとき光、⑥清浄光―貪りを取り除き私達を清浄な心に導く光、⑦歓喜光―瞋りを取り除き私達を歓喜に満ちた心に導く光、⑧智恵光―痴かさを取り除き私達を智恵深き心に導く光、⑨不断光―決して絶えることのない光、⑩難思光―私達の思議を超えた光、⑪無称光―讃え尽くすことのできない光、⑫超日月光―太陽や月を超えた光、という十二種類の光明の働きを具えた仏なのです。こうしたことから阿弥陀さまを十二光仏とも申し上げます。なるほど、私達の目に阿弥陀さまの光明を直接拝することは叶いませんが、その光明の働きは、太陽や月の光の働きがどれほど偉大であろうとも、私達人間の叡智をどれほど積み重ねようとも、それらをはるかに超えた無量なもので、それこそお月さまが目の前に立ちはだかろうとも、それに遮られることなく、優しく温かく、いつも私達を守り包み込んで下さるのです。　合掌

（林田康順）

法然上人をめぐる人々

極楽に帰った法然上人

石丸晶子

挿画・佐野芳朗

第四回

十

（おお、これが一切衆生の世界か）

黒谷の生活は厳しい。しかしそこには餓えないだけの食物が支給され、張りつめた静寂があった。

しかしここにあるのは……

人々の尊崇を集める釈迦堂に対して、今まで自分が描いていたイメージとあまりにも異なる周囲の状景、そして人々の姿に、青年はしばし茫然となった。

しかし何時までも茫然として立ち尽くしていることは出来ない。

青年僧は堂内に入り、内外むっとした腐敗と血のにおいを含む喧騒の中で、釈迦如来の前にひれ伏して祈った。

——非業の死を遂げた父をそして母を、極楽浄土に導き、父の遺言をわたくしに果たさせ給え。求道の道を究めさせたまえ。

青年は祈りに祈った。

一日が過ぎ、二日が過ぎた。一心に祈っていると、青年の心に周囲の喧騒が聞こえなくなり、ふと気付くと、彼はただ父時国に向かって呼びかけていた。

——おお父上。私はここにおります。十二年、父上のご遺言にしたがって叡山で修行してまいりましたが、いまだ悟れず、ご遺言のような敢然とした出離の道を歩けませぬ。わたくしはまだ迷っております。

——なぜ父上はあのような御最期を遂げなければならなかったのでしょうか。父上は「これも前世の宿縁だ」と言われましたが、あのようにお優しくご立派であった父上に、どのような宿縁があったのでしょうか。

——わたくしには分かりませぬ。わたくしの心は今なお、時としてあの夜のことを思い出し、明石定明への怨みに破れそうになります。叡山を駆け下りて美作に行き、定明を探し出

して刀を振るいたい思いに駆られるのです。
——ああ、父上。父上。

父に呼びかけている自分に気付く度に青年はハッとして釈迦に心を向けなおした

——如来よ、憐れみ給え。源空は未だこんなところにおります。黒谷にいても、そしてここ如来の前にひれ伏して祈っていても、時としてわたくしの心は定明への殺意でやぶれそうになっております。如来よ、どうかお救いください。憐れんでください。

四日が過ぎ、五日が過ぎようとしていた。
ふっと、気付くと青年は

——如来よ、どうかどうか一切衆生を憐れみ助けてください。彼らがいかに苦しんでいるか、如来はご存じです。この釈迦堂に救いを求めてやってきた人々を憐れんでください。

と一心に祈っている自分に気付いた。

——十二年、叡山で修行してもわたくしに悟りの道は開けませんでした。修行して学問を積んだ者に悟りは与えられ、極楽往生にいたるといわれておりますのに、わたくしも、そしてここ釈迦堂に集まってきた多数の人々も、如来の救済からは除外されているのでしょうか。

——どうか厳しい修行に耐え抜く力を与えられた者や学問を究める知力を持った者、そして堂塔を寄進できる財力のある者のみではなく、ここに集まってきた人々のような庶民をも、どうか極楽浄土にお導きください。

「このわたくし源空を導き、悟達せしめたまえ」の祈りは、気が付くと人々の救いへの願いと変わり、気付いてみると、このとき、父を殺された怨念は消えていた。

夜討ちされ、或いは父を殺されたのは青年一人ではないのであった。

ここには青年同様、生涯消えぬ苦しみを担わされた人々が、社会から見捨てられて僧になる道も、修行して悟達する道も閉ざされたまま、ただ呻き、罵り喚き、争い、そしてなお救済を求めて釈迦堂に集まってきていた……

十一

七日目が過ぎた。

八日目の早朝、青年は新たに生まれ変わった思いの中で教えを乞うべく南都へ向かった。

まず法相宗の蔵俊を興福寺に訪ねる。

「現在の仏教は、一切衆生の救済を説かれた釈尊の教えから外れ、貴族仏教になっております。わたくしは嵯峨の釈迦堂に七日間籠って悟道の祈願をいたしましたが、七日間、釈迦堂で見聞いたしましたものはあまりに悲惨でございました」

青年は言った。

「師僧にはいかが思われますか。衆生に救いはないのでしょうか」

「そなた、黒谷に居るそうじゃが、そう思うことこそが迷いだとは気付かぬか」

若い人間を教え諭すようにして蔵俊はいった。

「それにまず第一、釈尊の教えを貴族仏教にしておるのはそなたたち、叡山の僧侶どもではないか。この矛盾に気付かぬとはの」

可笑しそうに蔵俊は笑った。

「そこでそなたの悩みとやらに答えておくが、仏典には阿頼耶識、末那職といってな。われらが認めておる世界はすべて自分が作り出したものなのだ。十人がいれば十の世界がある。たとえばだ」

「……」

「わたしが今手を打ったとしよう。弟子は呼ばれたと思ってはいと答えてやってこよう。

しかし庭先にいる鳥は、鉄砲で撃たれたと思って驚いて逃げる。池の鯉は餌がもらえると思って集まってくる」

「……」

「どうだ、このように一つの音でも受け取り方がさまざまなのだ。そなたが哀れと思うた庶民とて、あれでなかなか強かでの。自分らは釈尊に救われておると思うておるかもしれぬ」

すでに一切経を青年は二度読み終えていた。阿頼耶識についての知識も末那職についての知識も持っていたが、蔵俊の答えに青年は何か根本的なところをはぐらかされた思いであった。

（蔵俊様をわたしの師僧と仰ぐことはできない）。

青年僧は興福寺を辞して醍醐に三論宗の寛雅を訪ねた。

「【空】の教えを学ばれよ」

来訪の趣を聞いた寛雅はうなずきながら一言のもとに言って退けた。

「大乗仏教の基本である【空】が分からぬからそのような悩みが生じるのだ。龍樹菩薩の『中論』や『般若経』は学ばれたか」

「はい」

「その年で、難解な『中論』を学んだとは感心なお方だ。しかし学んだだけではそなたのような悩みが出てくる。そこで唯識が必要となる」

寛雅はいった。

「分かり易く言えば、たとえばだ」寛雅は説明した。

「そこらに生えている草木をもって庵を建てたとしよう。庵が出来上がれば庵という現象が現れることになる。しかしこれを解体してもとの草木に戻してしまえば、先ほどまであった庵という現象は無くなっている。つまり、庵は存在しているとも言えるし、していないとも言えるのだ」

「……」

「つまり天地万物一切の物は実体として存在しているのではないのだ。その者が個人的に構想した【識】によって存在しているに過ぎない」

寛雅の説教はいつまでも続いた。

しかし、寛雅の問題意識と青年の問題意識とのずれは大きく、説教の内容も、すでに法然房が会得しているものであった。

青年はそこを辞して最後に仁和寺に華厳宗の慶雅を訪ねることにした。

十二

「なるほど、華厳のわたしに教えを乞うといわるるか」

慶雅はいった。

「【華厳経】は、釈迦が成道後、最初に説いた経典だが、光そのものである毘盧舎那仏の智慧の光が、一切衆生を照らして衆生は光にみち、またあらゆるものは関係性によって結ばれておると説いている。関係性は実体ではない。その折その折によって変わっていくものだ。これを【縁起】といい、【空】という。大乗仏教の根本思想だ」

「恐れながら存じております」

青年は静かに言った。

「わたくしが解決出来ずに悩んでおりますのは、その関係性の在り様なのです。関係性のなかで恵まれた者もおれば、関係性の端くれに置かれて、わたくしが先日、釈迦堂で目にいたしましたような庶民も多くおります。なぜ、毘盧舎那仏の光は慈悲の光となってあらゆる衆生を等しく照らさないのか…」

「うむ。いかにもそこが難しい難問だ。折にはそこをわたしとて考えなかったわけではないが…。まことこの世界には如来の光から洩れ出ておるような庶民も多く居るよの」

慶雅の許を辞して黒谷に帰った青年僧の日夜を忘れた勉学と修行がその日から始まっ

た。

当代の名僧三人を訪ねて教えを乞うたが、そのいずれからも納得のいく答えを得ることが出来なかった。

であれば、自分自身で迷いに、苦悩に、答えを見出さねばならなかった。後に、当時を回想して「寝食もままならず」と法然上人は言っておられるが、文字通り、答えが見出せずに「寝食もままならぬ」歳月が過ぎていった。

一切経を紐解き巻き戻し、また紐解くこと五たび。

いつしか「智慧第一の法然房」の評判が叡山や都にまで広まっていたが、法然自身にとっては光はどこからも来ず、「私のよう者はすでに戒・定・慧の器ではない」という内省と失意が深まるばかりであった。

（つづく）

仏教看護・ビハーラ学会 第8回年次大会

日程○2012年8月24日(金)13時00分～8月26日(日)15時30分まで

会場○淑徳大学 千葉キャンパス 〒260-8701千葉市中央区大巌寺町200番地

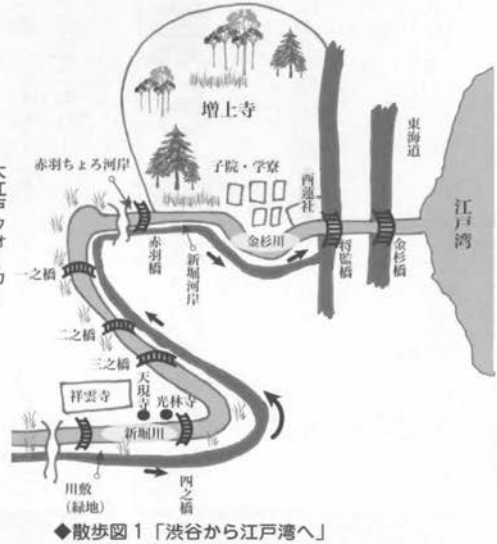
問い合わせ先
仏教看護・ビハーラ学会　第8回年次大会事務局
〒260-8701
千葉市中央区大巌寺町200番地　淑徳大学　田宮研究室内
E-mail：vihara12@soc.shukutoku.ac.jp
FAX：043-265-7331（大学代表）

江戸を歩く

第四十五回

内藤新宿から渋谷へ

大江戸ウォーカー
森 清鑑



◆散歩図1「渋谷から江戸湾へ」

祥雲寺

金王下橋（現並木橋）から渋谷川は中渋谷村、下渋谷村の広い田畑の間を縫って南に下る。次の比丘尼橋を過ぎると北側に福昌寺と室泉寺が連なる（JR恵比寿駅に近い）。ちょっと歩くと川の南側は広々とした川敷が造成されており、夏ともなれば緑一色の景観である。歩道はこの川敷の外側を巻いている。左に広々とした川敷とその奥にとうとうと流れる渋谷川を見ながらしばし歩くとまもなく水車橋が見えてくる。その先の今の新豊津橋を渡って北に行く。眼下に渋谷川を挟んで両側に広い川敷がある。緑豊かな、のどかな光景。川から二軒目の仲町通り右側に人形町玄治店で有名な医師、岡本玄冶の抱屋敷がある。その先が祥雲寺（臨済宗）の山門。寺域は川に沿って長方形に展開する。広大な寺域（子院を含めて現在もほぼ同じ）。周囲は武家屋敷が囲む。

祥雲寺は福岡藩主黒田長政の子、忠之が父長政の菩提を弔って建立。この長政の父が竹中半兵衛とともに秀吉を支えた知謀の人、黒田官兵衛（孝高、如水）である。秀吉をして次に「天下を治めるのは官兵衛」と言わしめた軍師。その子、長政はどちらかといえば武勇の人で関ヶ原では家康に付き、東軍勝利の立役者となる。この勝利は長政のお陰とまで讃えた家康は筑前に五十二万石を与える。福岡藩の誕生である。そういうわけで黒田家代々の墓が奉られている。長政の墓石はとりわけ巨大で高さ五メートルに及び、刻まれている法名は金粉塗りというめずらしいもの。墓石は大屋根の建物に納められている。大名墓は黒田家だけではない。播磨小野一柳家、美濃八幡金森家、大和新庄桑山家、筑後久留米有馬家といった代々の藩主墓石が並ぶ。それだけではない。著名な御典医曲直瀬家、宝生流家元（能楽）、常磐津節家元といった江戸を飾る文化人の代々の墓がある。祥雲寺の

敷地は、江戸初期、もともと名医曲直瀬玄朔の下屋敷であった。彼は二代秀忠の御典医で、世界で最初といわれるカルテ「医学天正記」を残した人物。その弟子が岡本玄冶で三代家光の病を救った名医。先ほど歩いてきた祥雲寺の門前に岡本家の抱屋敷が在ったが、本宅は日本橋人形町。歌舞伎で有名なお富、与三郎「源氏店」の場面は玄冶屋敷をもじったもの（げんやをげんじと洒落）である。無論、彼の一族の墓もここにある。

渋谷川の川敷に戻って東に歩くと左に毘沙門天で名高い天現寺、さらにその先は光林寺。川を挟む川敷は益々広くなり絶景。周囲は武家屋敷がびっしり。すぐに四之橋が見えてくる。これを過ぎたところで渋谷川は北上し、三之橋、二之橋、一之橋と続く。一之橋の処は小さな溜池のようになっている。川はここから東に転じ、その名も新堀川（古川）と改める。新堀川中之橋を越えると道は大きな広場となり、増上寺火災除けの広小路となり赤羽橋に着く。広小路にある赤羽ちょろ河岸、新堀河岸は著名な物資の荷揚げ河岸であった。赤羽橋を越えると川の左側（北側）一帯は増上寺の学寮、子院が立ち並ぶ。新堀川はこの辺りから金杉川とも呼ばれ、川沿いの増上寺境内、辰巳の角地は明版一切経を蔵し浄土宗第七祖の了譽聖冏上人を本尊とする西蓮社がある。川はこの先将監橋、金杉橋（東海道）を潜って江戸湾に到達する。

内藤新宿から牛込散歩

宿場町、内藤新宿のほぼ中央にある問屋場（人足や馬の補充、駅亭）から北に広がる縦長の広い寺域が江戸最大の閻魔様で有名な大宗寺である。ここは内藤家の菩提寺であるとともに、境内には大きな江戸六地蔵の一つがあった。甲州街道を往く旅人は、この高さ二・七メートルの笠かぶり地蔵に手を合わせ、旅の安全を祈願した。この辺りは、いわば内藤新宿の中心地である。

この大宗寺域の右塀に沿って四谷大通から北に進む一本の細い道がある。塀沿いに歩くと、表番衆町通にぶつかる。東西に細長いこの道が今の広い靖国通りで時代の変遷とはいえ、隔世の感がある。この道は江戸では細い割に重要な道で、それもその筈、道の両側に幕府警護の武士の館がひしめいていたからである。表番衆町通の番衆とは、幕府に詰めて将軍及び御所の警護にあたる者をさす。これら番衆が役目ごとにまとめて集合した地域が、いわゆる大縄地である。右に曲がって表番衆町通を東に歩く。かなり歩いても右側全て、百人組与力大縄地の塀が連なっている。道の左側は大縄地と御家人の屋敷が混在密集。塀が途切れると茗荷坂（周辺茗荷畑）。これを下ると窪地があって茗荷谷と呼ばれ、ここから源慶寺（浄土真宗）沿いに登ると左側が自証院の広大な寺域。ここは尾張藩主の母、自証院の菩提寺で、建設に節目の多い用材を用いたため、江戸時代、ふし寺とか瘤寺とか呼

◆散歩図「内藤新宿から高田馬場へ」

ばれた、桜の名所である。明治期、この近くに住まいした小泉八雲は寺域のすばらしい景観に感服し、頻繁に逍遙した。鎌倉中期の板碑（板石塔婆）も残っている。これより先、再び道の両側には御先手与力同心大縄地が延々と続く。そしてようやく前方に広大な尾張中納言の上屋敷が見えてくる。そこで上屋敷沿いを折り戻ると、合羽坂。今日もある合羽坂を上屋敷に沿って北に登る。右側に見える、徳川尾張中納言慶勝（六十二万石）の上屋敷は七万数千坪に及び、ここが明治以降、陸軍士官学校で勇名を馳せることになり、戦後には、現在の防衛省、警察庁機動隊地となった。

徳川御殿の西塀に沿って登ると、鉄砲角場（鉄砲場）と尾張殿馬場がある。いずれも尾張殿専用の鉄砲馬術弓術の練習場である。この練習場は上屋敷沿いに縦に並んで在り、馬場の北先には広い火除け地が設けられている。道は馬場を挟む形で二本ある。明治になると練習場は陸軍省用地となり、このあたりの坂道まで合羽坂と呼ばれるようになった。火除け地から左に曲がると江戸時代は武家屋敷、明治期は子爵、男爵邸。日露戦争で活躍した児玉源太郎の屋敷もここにある。少し行くと右側に月桂寺(臨済宗)がある。道はその名も月桂寺通（その先が東京女子医大）。江戸期の月桂寺は今よりもずっと広く、柳沢吉保はこの寺の檀家であり、彼は大和郡山に葬られたが長男以下の墓が建ち並んでいる。江戸時代当寺には、付近に時刻を知らせる「時の鐘」があった。再び馬場に戻って北に歩く。道の周囲は旗本、御家人、同心大縄地。やがて焼き餅坂に出る。右に折れ、坂を登る。この辺り牛込山伏町。一つ目の角を左に曲がり北にちょっと歩くと、左側に大学頭、三千五百石、林大学の下屋敷がある（上屋敷は丸の内にあった）。敷地面積は千三百余坪だが、林家歴代の廟所(びょうしょ)となっている。

林大学頭

林大学頭（だいがくのかみ）といえば、家康以来歴代の将軍に仕えた学者一族。林家の祖は著名な林羅山である。朱子学（宋学）を修め、二十三歳にして家康のブレーンになる。秀忠、家光にも教え、幕府政治に深く関与。江戸幕府の土台作りに大きく関わることになる。博覧強記に加えて実務の才を持った人であった。家光から上野忍ヶ丘に領地を与えられ、ここに学問所と孔子廟を建てる。これが五代綱吉の命により、神田昌平坂に移転。天下の幕府学問所、昌平坂学問所（お茶の水にある、孔子廟、東京医科歯科大学の土地）に発展した。羅山に続く、林家歴代の当主も代々、学問所の当主として幕府教学の責任者を任じ、三代目（羅山の孫）から歴代、大学頭と称されている。

江戸末期の当主は林復斎で、朱子学者にして外交官。日米和親条約の締結に携わった。

数学の天才、関孝和

林大学頭下屋敷の北沿いの道を西に歩き、北に転じると、七軒寺通り。道の右側に文字通り七軒の寺社が並ぶ。北に向かって六軒目の寺社が浄輪寺。この寺には日本が生んだ偉大な数学者、関孝和の墓がある。

関孝和（たかかず）は江戸前期（一六三九～一七〇八）の人物で、鎖国時代にあって難解な中国などの教書をマスターし、独学により数学理論を打ち立てた天才である。その業績は今日でいえば二次方程式、多項式、行列式に及ぶ。特に行列式はライプニッツより早く打ち立て、部分的にはニュートン、ライプニッツを凌駕していたといわれる。和算の極致を極め、人生不運が重なったが、受け継いだ孝和の弟子は定積分まで踏み込むに至っている。彼を勘定役に抜擢した家光の三男、綱重がもう少し生きていれば、緻密な数式に基づいた暦学を打ち立てたであろうと悔やまれる。しかし、日本人の優れた独創性を証拠づける天才として今日でも彼の研究がなされている。

小説

快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十三回

第二部

来江（ライン）の古城遥かなり

仏教界に清教徒革命!?

仏教界にルターよ、いでよ!?

海旭は自らを仏門へと誘ってくれた福田行誡の出会いの回想にひたり、行誡による兼学の目覚めなくして今の自分はないと改めて感得したところへ、「おいおい、なにをぼんやりとしている」と言われ、我に返った。あわてて回想から脱けだすと、行誡と兼学について、なんとかかいつまんで説明した。理解してもらえるかどうか不安ではあったが、キリスト者も無神論者も社会主義者も一様に顔を見合わせて頷いた。

「なるほど、そういうことだったのか」と自由思想団は言った。「おぬしがわれわれと談論風発、宗教家だけでなく社会主義者や無神論者とも交わるのも、その兼学とやらの精神からなのか。大いに結構だ」

「大いに結構だが」とカトリック刷新派が引き継いだ。「だったら、なぜその兼学の精神を信徒たちの間に発揚させぬのだ」

「そうだ、そうだ」とプロテスタントが乗じた。「国民の大多数の仏教徒が兼学とやらをしたら、日本の救貧活動は一気に活性するだろうに。われらキリスト者に徒らに名をなさしめることもなかったろうに」

たしかに言われるとおりだった。だが、現実は先ほど紹介した公認派の動きもあってなかなか容易ではなかった。海旭は厳しい現実をどう説明しようかと迷っていると、プロテスタントが訊ねた。

「おぬしの兼学の精神に共鳴する仲間はいるのか?」

「いるとも」と海旭は応えた。「きみたちのキリスト教と同じで、仏教と一口に言っても様々な宗派があり、これまで相争ってきた。しかし時代の大転換期には争うよりは学びあうべきだというのがわが行誡師の兼学の精神だ。僕はその行誡師の教えに従い、ドイツに留学する二年ほど前、仲間をかたらって兼学の運動を興した。いまのところ仏教の各宗派から十数人の集まりで、数や影響力では井上円了らお上の庇護を求める公認派にはるかに

及ばないが、志だけは負けてはいないつもりだ」海旭はプロテスタントへ顔を向けた。「君たち新教にも大いに学ばせてもらっている」
「ほう、われらの何を…?」とプロテスタントは身を乗り出した。
「われらが会の名前を仏教清徒同志会とした」と海旭は言った。「〝清徒〟とはピューリタンの日本語訳だ」
十六～十七世紀にかけて英国では、ピューリタンたちが宗教改革の端緒をつくり、ついにクロムエル革命という政治体制の転換を促した。海旭たちが「仏教清徒」と名乗ったのには、英国の「清徒」にならって、日本の仏教革新の担い手たらんとする決意がこめられていた。
「ワタナベ、おぬしはいつもわれらをびっくりさせる」とカトリック刷新派が言った。「たしか昨年の暮れのマリア祭のときだったか、聖母マリアと仏教の慈悲の神の…なんと言ったか?」
「観音菩薩だ。ただし神ではない、仏の化身だ」と海旭は答えた。
「そうそう、その観音菩薩とマリアはとても近い存在だと。これでもわれらキリスト者を驚かせるのに十分だが、さらに、冗談半分で、おぬしに、観音菩薩とマリアとどっちが好きかと訊いたら、なんとマリアだと。あれには驚きを通り越して呆気にとられた。それが、今度はピューリタン革命にあやかって日本の仏教の革新をしようというのか」
「そうだ」と海旭は勢いづいた。「わが仏教清徒の同志には、仏教界のマルチン・ルターよいでよ、と檄を飛ばして、このドイツへやってきたのだ」
「なんだと、英国だけでなく、わがドイツの宗教改革者にもあやかろうというのか。こいつはまた痛快無比な大議論になりそうだ」とカトリック刷新派が目をむくと、プロテスタントが後を引き継いだ。
「よし、河岸を変えて、大議論を続けようではないか。今が季節の焼き栗を肴に新酒（ホイリゲ）を酌み交わしながら」

一同は、残りのビールを泡まで飲み干すと、野外へと繰り出していった。

経緯会から仏教清教同志会へ

夜風に吹かれて街中をいくと、あちこちの居酒屋やレストランが「新酒あります」の看板を掲げて客を誘っている。そのうちの一軒の居酒屋に入り、この年初の樽出し酒を注文、軽いが爽やかな酸味のアルザスワインの盃を挙げると、プロテスタントが促した。

「それで、ワタナベ、日本におけるおぬしたちの宗教改革運動、仏教の清教徒（ピューリタン）とやらについてきかせてくれ」

「少々長くなるが…」と言いながら海旭はとつおいつ語りはじめた。前の店ではもっぱら聞き役の海旭だったが、この店では主役となった。

海旭十五歳のみぎり、弱輩ながら、福田行誡を前に「仏教諸派だけではなく、キリスト教からも学びたい」と宣言して、導師を大いに頼もしがらせて以来、海旭のなかで、兼学の志は燃つづけていた。しかし、いきなりキリスト教と兼学するのは唐突すぎるので、とりあえず同じような考えをもつ仏教界の仲間はいないかと探していたところ、ちょうど海旭が浄土宗学本校を卒業した明治二十八年暮、「同憂の士」を発見した。類ならぬ「憂い」は友を呼ぶものらしい。それは「経緯会」という仏教諸宗派を超えた勉強会である。主宰者は古河老川。海旭より一歳年長の明治四年、和歌山の浄土真宗本願寺派の寺に生まれ、東京帝国大学卒業後、在家の僧侶として「中央公論」などに論文を寄せて、自由主義的立場から言論活動を展開。「討究の自由と宗派の容認」を活動の二本柱に謳い、会の名称はこの二本の柱を〝経〟（横糸）と〝緯〟（縦糸）にすることに由来していた。

海旭はここで高島米峰や杉村楚人冠らと出会い、絆を深めていった。米峰は浄土真宗本願寺派の寺に生まれ中学教師、新聞記者を経て後に東洋大学学長、杉村は英語の通訳を経て新聞記者といずれも異能の個性派ぞろい。

また同人の年齢がおおむね二十代というのも、海旭に親近感をいだかせた。

彼らは海旭の浄土教報の事務所にあつまっては、議論と交流をふかめていたが、明治三十一年二月、古河が突然死去、そこで経緯会を発展的に解消し、あらたに仏教清徒同志会を立ち上げることになった。経緯会はどちらかというと言いっぱなしのところがあったが、言ったからには実践する、実践するためには理屈を極める姿勢へと改めた。そして、現状にあぐらをかく旧仏教にもはっきりと対決。旧仏教を、「疫病平愈富貴祈祷等をする迷信的仏教」「無常観に立って人生活動の真味を教えない厭世的仏教」であるとして絶縁を宣言。もはや旧仏教を改革しても新生命は創造できないから、新仏教を起こすと謳いあげたのである。

「なるほど」と海旭の話が一区切りしたところでカトリック刷新派が言った。「ということで、おぬしは、日本における仏教革新のマルチン・ルターになろうというのか。ほう、そいつは豪傑だ」

「いやいや」と海旭は手をふった。「そんな大それたことは考えてはおらぬ」

そう答えながら、海旭は盟友・高島米峰と交わした議論を思い出した。

とある日、仏教清徒同志会の運営について打ち合わせをしていたところ、米峰が、この程度の小人数の寄り合いで果たして仏教の革新などできるだろうかと弱音を吐いた。これに対して、海旭はこう言って励ました。

「なにごとも勇往だ、邁進さ、努力さ、奮励だ。不断の精進、無尽の誓願だ。大乗修行の本領はここにあるのじゃないか。彼の国においてもしかり、マルチン・ルターが出て…」

「おお、ルターときたか、宗教改革の旗振り役の。耶蘇とも仲よくやれというおぬしらしい。で、ルターがどうした…」

「ルターが出る間にはあまたの宗教改革の団体やら一派があったのだ」と海旭はことばに熱をこめた。「その幾多の志士たちの孜々営々たる運動があった。彼らは、火あぶりの

煙と化すのもおそれずに改革の旗をふりつづけたのだ。われらは、ここに着目・活目し学ばねばならぬ。すなわちルターよりも、宗教史に名をとどめない努力者に尊崇を払わねばならぬ。わが日本では、偉人を呼ぶ声が大きいが、実は偉人が出るように尽力し、努力しなければ、ルターも法然上人も、日本には出てこぬわけさ。沢庵漬け一本も漬からんのさ」

「これは面白いたとえだ。ルターと法然と沢庵漬けはおんなじか。臨済の坊主どもは目をむいて怒るぞ」と米峰は笑った。

「労働者の家」に学べ

「おいおい、ワタナベ」とカトリック刷新派が海旭の回想をやぶった。「何をニヤついているのだ」

海旭は我に返って答えた。「いや、仏教清徒同志会のあり方をめぐる議論を思い出してね」

「ほう、それはどんな」とプロテスタントが促した。

「われらは、仏教界のルターを生み出すために名もなき礎になろうと約したのだ」と海旭。

「それは見上げたものだ」とプロテスタントが目を丸くして訊いた。「で、成果は?」

「実は同志たちの便りによると、機関紙を刊行するのに汲々としているらしい」と海旭が肩を落とした。「異教の地にあって応援もできず、悩むことしきりなのだ…」

それまでキリスト者に議論を委ねていた自由思想団が割りこんだ。「どうも聞いていると、ワタナベたちの運動は理論と実践の統一をうたっているわりには、頭でっかちのように思える。何か地面にしかと足をつけた実践が必要なのではないか」

「それは俺も同感だ」とプロテスタントが同意した。「地に足がついた実践となると…」

「やはり救貧運動だろう」とカトリック刷新派が引き取った。「前の居酒屋でも誰かが言ったが、日本は、ドイツとちがって、国も社会主義者も取り組みがいま一つだ。だからこそ、むしろ宗教の出番がある」

「となると、やはりわれらが慈善活動を大いに学ぶことだな」と二人のキリスト者が口を揃えた。「無神論者たちは国の制度を変えることに熱心なだけだから」

「いやいや」と社会民主党が久しぶりに議論に復帰した。「ストラスブルク方式という画期的な救貧制度を行政に作らせたのはわが社会民主党の運動の成果だ。しかし、いっぽうでワタナベが体験した赤いベルリンのような状況もある。われらも国に要求するだけでそれを黙過しているわけではない。国や行政にしっかりやれと尻押しをするだけでは限界がある。社会主義者も足らざるところは自ら汗をかかなければならない…」

「たとえばどんなことを…」と海旭は促した。

「たとえば、『労働者の家（アルバイテルハイム）』がある」

「労働者の家？」海旭は興味を覚えて訊き返した。

「国や自治体の救貧施策では救えない貧窮労働者を立ち直らせるために、労働組合や消費者組合などが連携して運営している施設だ」

海旭がさらに訊こうとしたところ、自由思想団が懐中から鎖つき時計を取り出し、針を確かめた。「おや、こんな時間か。そろそろお暇しなければ…。今夜のオペラ座の切符が手に入ってね。遅れると女房殿に叱られる」

「タンホイザーの初日だな。それはうらやましい。僕はとりそこねたよ。では、今夜はこまでとして。ぜひ、近いうちにその『労働者の家』やらについて教えてくれ」

実は軽い社交辞令で言ったつもりだったが、これが後の海旭の生き方を決定することになろうとは、もちろん当人は知るよしもなかった。

（この項つづく）

暑中御見舞申し上げます

平成二十四年

浄土門主
総本山 知恩院 門跡第八十八世
伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主
八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主
服部法丸
〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主
髙橋弘次

大本山善導寺
法主
阿川文正

大本山光明寺
法主
宮林昭彦
鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七(二二)〇六〇三

大本山清浄華院
法主
真野龍海

浄土宗宗務総長
豊岡鐐尓

法然上人御誕生地
美作
誕生寺
〒709-3602 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL(〇八六七)二二〇二
FAX(〇八六七)二二六二

(学)大乗淑徳学園理事長
淑徳大学学長
長谷川匡俊
〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
理事長
校長
麻生諦善

暑中御見舞申し上げます

平成二十四年

養運寺
田中光成
〒194-0032 町田市本町田三六五四

大鹿山弘経寺住職
金田進徳
〒302-0023 茨城県取手市白山二・九・二八

十八檜林霊場会
呑龍上人祈願所
蓮馨寺
住職 粂原恒久
〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話 〇四九（二二二）〇〇四三
FAX〇四九（二二六）〇六七六

赤坂六地蔵尊
浄土寺
住職 阿川正貫
〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺
飯田實雄
〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五（八三）二三六〇

清水湊
忠高山
實相寺

家康公祖母の旧地
玉桂山
華陽院
住職 堀田卓文

勝願寺
〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八（五四一）〇二二七

お骨仏の寺
一心寺
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六（六七七一）〇四四四

暑中御見舞申し上げます

平成二十四年

白本尊阿弥陀如来
静岡
宝台院
住職　野上智徳

〒112・0002
東京都文京区
小石川三丁目十四番六号
無量山
傳通院
電話〇三（三八一四）三七〇一（代表）

九品阿彌陀如来
淨眞寺
〒158・0083
世田谷区奥沢七・四一・三
住職　清水英碩

願行寺
佐藤成順
〒140・0004
品川区南品川二・一・一二

大吉寺住職
成田昌憲
〒154・0017
世田谷区世田谷四・七・九

梅窓院
住職
中島真成
東京都港区南青山
2-26-38
電話　03（3404）8447
ホームページ
http://www.baisouin.or.jp

鎌倉大仏殿
高徳院
〒248・0016
鎌倉市長谷四・二・二八
電話　〇四六七（二二）〇七〇三
FAX〇四六七（二二）五〇五一

光円寺住職
佐藤良純
〒112・0002
文京区小石川四・一二・八

光取寺
大室了晧
〒141・0021
東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話〇三（三四四一）八三八四

浄土誌上句会

FORUM 浄土の広場

●礼

〈特選〉無礼講と言いて始まる花の宴　浜口　佳春

花の下に敷き物を広げ、酒肴を並べて車座になる。一人が立ち上がると、乾杯に先立って「今日は無礼講で」と言う。句の頭にこれを挙げることで、友達同士などではない、ややかしこまった座だと感じさせる。

〈佳作〉礼状にひそむ告白さくらんぼ　笠井　亞子

礼拝堂の木椅子の軋み夏立ちぬ　斉田　仁

祭礼の祢宜の烏帽子蝶止まる　石原　新

●去

〈特選〉去り際に猫抱いてやる端午の日　山内　桃児

端午の節句に招かれて行ったのだろう。宴も終わって立ち上がる。皆が騒いでいる間おとなしくしていた猫が目について、そっと

選者=増田河郎子

抱き上げた。それだけのことだが、「抱いてやる」は、よくおとなしくしていたというようだ。

〈佳作〉透明な烏来て去る青葉闇　村松　芳郎

春の泥つけて去り行く中学生　山口　信子

蝶去りてにわかに雷雲近づき来　増田　信子

●自由題

〈特選〉

十軒の岬の家並みつばめ来ぬ

池田　伊吹

漁業をなりわいとする岬の集落である。海に突き出た狭い土地に、十戸の家が肩を寄せ合うように並んでいる。その家並みを燕が来てはひるがえる。軒には子燕が待っているのだろう。前には豊かな海が広がっている。

〈佳作〉雑草にふれて夏めくふくらはぎ　小林　苑を

友訪えば庭に声あり白牡丹　吉崎美和子

青き空浜辺に海女の脱衣籠　さとうゆう

誌上句会〈編集部選〉

■礼

朝礼の子ら活き活きと新入生　佐藤雅子
我はただ禮讃唱え歳をとる　飯島英徳
起立礼着席すれば隣に夏　小林苑を
返礼の品満開の花水木　鈴木真理子
蠅という大信田礼子的なもの　西原規夫
敬礼の小さき手夏の駅舎かな　井口吾郎
車窓より青葉若葉に一礼す　結城　聡
目礼の紳士ら二人生ビール　道田禄助
御礼と書かれ筍土間の隅　石原　新

■去

過去という恋路いとおし春疾風　佐藤雅子
夏浅し去勢の牛が目をつむる　斉田　仁
去るものは追わず五月の杭である　小林苑を
水底へ消え去る村の罌粟の花　小栗幸隆
去り際の声なき言葉聖五月　鳥羽　梓
幾つかの夏へ消去のボタン押す　宮島みどり

■自由題

ペダル漕ぐ老の鼻唄春田ゆく　佐藤雅子
はつなつの陽に球根を干しにけり　中嶋いづる
いちにちを金魚心地の北千住　西原規夫
石鹸はレモンの匂いして立夏　斉田　仁
緑陰の誰も読めない草書体　長谷川　裕
怒鳴りつつばあちゃんが売る浅蜊かな　笠井亜子
万緑に忘れものあり白き靴　山内桃児
風止んでダム予定地の青田かな　金井　槇
やがて死ぬけしきの見えて昼寝かな　内藤隼人
とことんとことん紙の力士や柿若葉　井島　肇
夜濯ぎのパジャマとわたしだけの部屋　齋藤ゆかり
母の日や羽蟻うるさき墓ひとつ　新田あかね

浄土誌上句会のお知らせ

兼題　演　力

自由題

締切・二〇一二年七月二十日
発表・『浄土』二〇一二年十月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

92かい目 さっちゃんはネッ

かまち♡よしろう

かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。（静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞）

編集後記

いつ見ても輝き渡る海の色

岱潤

先月の私の俳句に、「竜巻など季語にない」と叱責を買った。友人がすぐに「アメリカの季語にはあるんじゃない？」と応援してくれたが、確かに日本には今まで竜巻など、滅多に考えられない現象であったが、ここのところ頻繁に注意報が聞かれるようになった。気候は本当に変わったようだ。

四季をはっきり感じられたのは今や昔の話で、今は冬と夏の二季になった感じさえする。春の花はあまりにも短く、秋の紅葉は冬の初めに過ぎないのは、何か今の私たちの人生にも言えそうだ。人生を学ぶ期間である春は、あっという間に過ぎ、余暇としてゆっくり楽しむはずの秋が、気がつくこともなく終わってしまっているような気がしてならない。東北の被災地で自死を選ぶ人が後を絶たないと聞く。バリバリ働く夏だけが人生ではない。今生きているそのことを楽しむだけの人生があってもいい。以前「人生など無価値、生きる意味などはじめからない」と言い、価値や意味がなければならないとした風潮を批判したのはひろさちや氏だが、自然も政治も絶望的な現代、とにかく生きていることが何よりも大事なことだ。中国では人生の四季を海の色に譬え、青春（十代から二十代）群青の海、朱夏（三十代から四十代）燃える朱の海、白秋（五十代から六十代）白く輝く銀色の海、玄冬（七十代以上）玄く艶やかにうねる海とした。それぞれが輝いている海である。（長）

編集チーフ　長谷川岱潤
編集スタッフ　斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
巌谷勝正（目黒・祐天寺）
魚尾孝久（三島・願成寺）
大江田博導（仙台・西方寺）
北山大超（焼津・光心寺）
加藤亮哉（五反田・専修寺）
熊谷靖彦（佐賀・本應寺）
粂原恒久（川越・蓮馨寺）
佐藤孝雄（鎌倉・高徳院）
佐藤成順（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光圓寺）
東海林良雲（塩釜・雲上寺）
須藤隆仙（函館・称名寺）
高口恭行（大阪・一心寺）
田中光成（町田・養運寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村康雅（清水・実相寺）
中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
野上智徳（静岡・宝台院）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
堀田卓文（静岡・華陽院）
本多義敬（両国・回向院）
真野龍海（大本山清浄華院）
朏　博之（網代・教安寺）
水科善隆（長野・寛慶寺）
宮林昭彦（大本山光明寺）
山田和雄（諏訪・貞松院）
（敬称略・五十音順）

ホームページ　http://jodo.ne.jp

浄土　七十八巻七・八月号　頒価六百円　年会費六千円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷　平成二十四年六月二十日
発行　平成二十四年七月一日
発行人　佐藤良純
編集人　大室了晧
印刷所　株式会社　シーティーイー
発行所　法然上人鑽仰会
〒一〇五・〇〇一一
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内
電　話〇三（三五七八）六九四七
FAX〇三（三五七八）七〇三六
振　替〇〇一八〇・八・八二八七

泰雲の美味探訪

文と写真
浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

ゆたか 浅草

今、東京スカイツリーという世界一のタワーで賑わっている浅草駅から、５分程のたぬき通りから１本入った路地裏の老舗とんかつ屋『ゆたか』を再訪した。浅草は路地裏に美味しいお店が多くある。店内は脂臭さを全く感じさせない、隅々まで掃除の行き届いた落ち着いた雰囲気。看板のロースカツ定食（1950円）を注文。薄い衣に薄ピンクに揚げられた肉はきめ細かく、柔らくジューシー。ソースは特性ウスターソースと藻塩。これが嬉しい。藻塩は肉の旨味を邪魔せず上品にいただける。聞けば自家製のパン粉は４日かけてつくり、肉はキメの細かな脂身の美味しい群馬産のやまと豚、揚げ油は高級綿実油とのこだわりが「胃もたれのしない軽やか味」の王道のとんかつになる。他にヒレかつ、冬の牡蠣フライもファンが多い。昭和22年創業なので60余年地元に愛され、多くの遠くからの再訪者がいることが頷ける。

台東区浅草1-15-9
03-3841-7433
定休日　木曜日、月1回水曜日
11時半～14時半(LO) 16時半～20時半(LO)
(平日14時(LO) 17時開店)

monthly JŌDO 2012・7・8 発行人／佐藤良純 編集人／大室了晧 編集チーフ／長谷川岱潤

アイエムが目指す「寺院ルネッサンス」とは…

日本人の心があぶない！ そう感じたとき
寺院と周縁のはざまで活動する私たちアイエムに
ひとつの気づきがありました。
「寺院とは地域の人々の“苦”と向き合い
“学び・癒し・楽しみ”があり、人々を
元気にしてくれるところでなければ」と。
このような寺院と周縁の間に新しい信頼関係を築く
支援活動が、寺院ルネッサンス活動なのです。
今、アイエムでは寺院から地域・周縁への
各種文化発信行事の開催を
支援致しております。

お堂コンサート

寄席

お堂能

創業30年 周縁と寺院を結ぶ 株式会社アイエム

東京都中央区京橋 2-8-1 八重洲中央ビル
Tel. 03-3535-5555 Fax. 03-3535-2730
インターネット アイエム で 検索